

ふるさとを語る

兵庫県は、5つの国から成り立っており、多彩な人材を輩出しています。そこで、毎回、さまざまな分野で活躍中の方に「ふるさとひょうご」を語っていただいています。

今回は、国連広報局の直属機関として、国連の活動全般にわたる広報活動を行う国連広報センター（UNIC東京）所長の根本かおるさんに、榎本県人会事務局長がお話を伺いました。



根本かおる

(ねもと かおる)

神戸市出身

東京大学法学部卒。テレビ朝日を経て、米国コロンビア大学大学院より国際関係論修士号を取得。1996年から2011年末までUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）にて、アジア、アフリカなどで難民支援活動に従事。ジュネーブ本部では政策立案、民間部門からの活動資金調達のコディネートを担当。WFP（国連世界食糧計画）広報官、国連UNHCR協会事務局長も歴任。フリー・ジャーナリストを経て2013年8月より現職。著書に『日本と出会った難民たち ― 生き抜くチカラ、支えるチカラ』（英治出版）他。

根本さんは、現在国連の広報を担当する国連広報センター所長を務めておられますが、元々、国連で働いてみようと考えていたのですか。

早くから強い信念を持って国連職員になったわけではありません。ただ、子どもの頃、父親の仕事の関係で西ドイツで4年間を過ごしたのですが、私自身が有色人種として差別されたり、東西に分断されたドイツで、ドイツ人の友だちが親戚に会えなくて悲しんでいるといった経験をして、権利や人権、平和のありがたさというものを感覚的に感じ取っていたと思います。

その後、テレビ朝日のアナウンサーになられました。テレビ局は今も大変な難関ですが、どういう仕事をされていたのですか。

日本に帰ってきて、大学を卒業しアナウンサーとしてテレビ朝日に就職しました。何百倍の競争率でした。関西弁から標準語に直すのに挫

折しました(笑)。取材して問題提起するという報道記者の方に向いているのではないかと思ひ、希望して報道局に異動したのですが、テレビ朝日としては初の女性政治担当記者だと珍しがられ、男性の働き方に自分をなまかせて突っ走るという日々を送っていました。女性として長く報道に携わるには専門分野を持ちたい。当時、私は日米自動車摩擦を取材して「コーラスステーション」で久米宏さんの隣で解説することもありました。アメリカの専門家でもないのに、したり顔で伝える自分が嫌だなど思っただけです。アメリカに住んでみて、アメリカの論理を理解して専門知識も身につけたい。それで、会社の幹部を説得して、2年間休職して、ニューヨークにある大学院に留学したのです。

大学院では政治経済を専門に学ばれたのですか。

国際関係論を専攻しました。ニューヨークという場のおかげで大学院に国連職員がやってきて、国際問題についてディベートする時間がしよっちゅうありました。だんだんと国連という存在が近くなってきた。当時、国連難民高等弁務官として活躍されていた緒方貞子さんにあこがれていました。夏

休みを利用してネパールの国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に難民キャンプのインターンとして行きました。国連の仕事を実際に経験する機会に恵まれ、ジャーナリストとして鍛えた書く力、大学院時代に身につけた英語力を活かせる場かもしれないと思ひ、試験を受け国連で働くことになりました。会社の幹部からは、戻ってくる約束で留学に出したのにと怒られました。今は和解して(笑)、とても良い関係です。

小さい頃のドイツでの経験が国際関係に目を開くきっかけになった。ドイツ語や英語を身につけた。日本人が国際的な仕事をする場合、外国語が大きなハードルになりますね。

外国語はとにかくしゃべりたいという気持ちがあつて初めて伝えるという作業になるのです。文法的にはメチャメチャでも、伝えたいという情熱があれば多少の言葉のハンディはカバーしてくれると思います。

インターンでは、難民に何が欲しいのかを聞いたり、応援したりという活動をされたのですか。

難民の子どもの教育の問題を担当しました。「幸せの国」として知られているブータンにも民族問題があるんですよ。本国のブータンで教育の権利を奪われて、子どもたちがネパールの難民キャンプに逃げてくる。こうした事情をより深く知るために避難してきた子ども達から聞き取り調査をしました。

国連の職員となってコンゴなどで難民保護の仕事をされています。インターンの時の経験が役に立っているのですか。

インターンで曲がりなりにも難民キャンプで働いたことが、UNHCRが私を採用したことにつながっているでしょう。

難民キャンプは「駆け込み寺」のような場所なんですね。自然発生的にできるのではなく、国連が作るのですか。

いろいろなパターンがありますが、大体は難民を受け入れる国の政府が一義的に責任を負っています。そういう国はネパールのように貧しい発展途上国のケースが多い。資金的余裕や専門的知識も経験もないという中で国連などに頼るところが大きい。UNHCRは難民保護を使命とする国連機関なので、頼りにされる組織なんです。私が経験したキャンプもネパール政府とUNHCRが二人三脚で運営していました。

紛争が起こっている所だから、かなり危険な地域ですよ。国連職員でも攻撃されて命を落とすこともあるのですか。

かなりの同僚を殉職で失っています。「明日は我が身」だと背筋が寒くなることもあります。特に9・11の同時多発テロ以降、国連が必ずしも中立的な立場として見られないケースが

増えています。極めつきが2003年8月19日に起こったイラク・バクダッドの国連事務所爆破です。残念ながらアメリカ側に荷担していると見られました。昔と比べると活動しにくくなったという厳しい状況です。8月19日は「世界人道デー」になり、人道援助活動で殉職した人たちに思いを寄せる国際的な記念日になっています。

紛争の場で難民を支援するのはまさに国連ならではの仕事ですね。危険もありながら、そこで自分がやっているとどう感じますか。

やっぱり難民をはじめとする現場の人たちから学ぶところが多いということでしょうね。人のエネルギーであったり、大変な困難を乗り越える力だったり。難民というのは全てを失って出てくるのです、目の前で家族を殺されたという経験をして逃げてきて生きながらえている。難民は大変な喪失体験をしているのです。

そういう難民一人ひとりの経験を聞くのですか。

聞く場合もありますし、聞かない場合もあります。語りた人もいれば語りたくない人もいますので。でも喪失体験と心の折り合いをつけながら前を向いていこうとしているわけですね、そこから人間の「再生の力」を学ばせてもらった。人生訓ですよ。そういう大変濃い体験をするので、肉体的には大変ですが、やりがいは大変大きい。今も、感謝の気持ちは大きいです。

何もかも失い家族も失って命からがら難民キャンプに逃げてくる、希望も何もないわけですよ。難民キャンプはその人が生きていくんだという希望を与える場所なのですか。

私達が希望を与えるというのはおこがましいことだと思います。それは皆さんが内在的に持っている力なんです。それをちよつとでも背中を押してあげること、そういった支援活動を目指しています。たぶん、阪神・淡路大震災の時の兵庫県であったり、東日本大震災の東北の方々と同じことだと思えます。大変な苦労をなされた、悲しみもあった、でもそれをそれぞれが持っている力で乗り越えられたわけですよ。東北の被災地に支援に行った人が「支援するつもりで行ったのに逆に自分が元気をもらった」と言われます。それと同じことですよ。

現在は国連広報センターでどのような活動をされているのですか。

国連広報センターは日本が国連に加盟した2年後の1958年にできたオフィスです。日本の方々から日本語でわかりやすく情報発信しています。インターネットでの発信や記者会見、記者勉強会、新聞・雑誌・テレビの取材などさまざまです。

安全保障理事会や世界文化遺産のユネスコなどはよく聞きますが、国連は活動の幅が広がってなかなか全体像がつかめない。

国連の活動は多様です。平和と安全、開発、人権、人道。また、気候変動など環境問題も国連が取り組まなければならぬ大切な問題です。活動が幅広いだけに、国連についていっただけの何かをわかっていく、というのは当然かもしれません。わかりやすい広報活動を心がけていければと思っています。

地球規模の問題が多様化してきているということでしょうか。

気候変動の問題など、国家レベルだけの取組みでは解決できない問題も増えています。だからこそ、国連は今、NGO、企業、学術界を含めて、あらゆるパートナーとの協働を構築し、さまざまな地球課題への対応を図っていくこととしています。

兵庫県内にもWHO神戸センターなどの機関があります。国連広報センターでは全体をカバーしているのですか。

国連広報センターは国連広報局直属の組織です。第一に事務総長を中心として国連事務局が発信したいこと、次に日本に出先を持つていない国連の組織のための広報を行っています。例えば、国連人権高等弁務官事務所という人権問題を扱う機関は日本にはない。人権は「平和と安全」、「開発と並んで国連の3つの柱の1つで重要なテーマなので、国連広報センターには積極的に広報する役割があります。

北朝鮮の拉致問題も関係しますね。

関係します。また、女性の問題を扱っている「国連ウイメン」という国連機関があるのですが、日本に出先がないんですね。こうした人権や女性問題は国連にとって大変重要な問題ですので、センターでそれぞれの機関と調整して発信しています。

根本さんが所長になられて特に力を入れていきたいことは何でしょうか。

人権と女性の問題に加えて、働く場としての国連の広報です。国連で働く日本人職員を増やしていきたい。日本人が少ないんですよ。大学を卒業してすぐに入れる職場ではないのですが、海外で仕事をしてもいいなと思っている人たちの一つのステップとして考えていただいてもいいのではと思います。

国連の分担金は日本は結構出しているんですね。日本人の職員は少ないのですか。

日本が国連に払っている分担金はアメリカに次いで第2位です。職員数では日本は8位、全体の2%から3%程度です。国連と日本の採用システムとがうまくリンクしていないのかもしれない。欧米の場合、シブホッピングが当たり前ですが、日本ではまだまだ終身雇用制が多い。また、国連の専門職以上

は一般に修十号が必要なので、日本で就職する場合と違うのかもしれない。国連で働く魅力を伝えていきたいと思っています。

国際社会で日本が果たしている役割は大きいと思いますが、日本の国際貢献は評価されているのでしょうか。

国連の職員は独立性、中立が求められ、出身国を背負って働くわけではありませんが、その国の美徳や価値観が活動に現れる部分があります。日本は物事を白か黒か二者択一で選ぶのではなく、バランス感覚を持って物事を包括的に見る訓練ができています。今、紛争が起きている国は圧倒的にアジア、アフリカが多い。こうした国々は欧米的な1か0かという二者択一的な価値観ではない。さまざまな国の人々と調整しながら支援するという場面で日本人の美徳や価値観がもつと活かされると思います。絶対的な善や悪というのではない。それぞれに言い分があり、どちらから見ると全然違った風景が見えてくる。バランス感覚でものを見られる日本人の国民性や価値観は貴重だと思います。

「三方二両損」という考え方が国際的にも通用するのですか(笑)。兵庫県でも広東省など姉妹州省との交流に取り組んでいます。地域レベルでの国際交流についてどのようにお考えですか。

国際交流をあまり拘り定規に構える必要はないと思っています。近所に外国人の方が住んでいる、こんな食べ物や食べ物を食べている、「こんな言葉をしゃべっている」という発見がある。その地域で外国人との触れ合いを大切にすること、それが全ての交流の出発点になる。グローバルな土地柄を兵庫県は持っていると思います。

国際化が進展する中で、ご出身の兵庫・神戸へのご助言があればお聞かせください。

神戸ほど生活の風景の中に異国、外国というものがあるのが自然に飛び込んでくるところはあまりないと思います。インド人、中国人、在日韓国・朝鮮人、ベトナム人もいます。ひとたび神戸を離れてしまうと「何て恵まれたユニークな環境だったのだろうか」と思います。

これから国際関係がより深まっています。大学生や社会に出て行く若い人たちにアドバイスをお願いします。

それぞれに合った世界への入口を見つけてもらいたいです。私の英語への興味はビートルズの歌詞が出発点でした。レコードを聴いて歌詞を理解したいと思い、辞書を引いて勉強を始めた。サッカー選手のことでも英語がわかった方が知識が深まる。料理が好きなら外国語のレシピが理解できると世界が広がる。音楽でもスポーツでも好きなところから世界に目を向けてもらえばいい。どんな人口でもそれぞれが世界につながっているのです。